

(53)

氏名(生年月日)	ヤマ シタ ノリ ヨ子
本 籍	
学位の種類	医学博士
学位授与の番号	乙第1052号
学位授与の日付	平成元年11月17日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当(博士の学位論文提出者)
学位論文題目	発熱を伴った急性蕁麻疹の臨床的組織学的研究
論文審査委員	(主査)教授 肥田野 信 (副査)教授 滝沢 敬夫, 内山 竹彦

### 論文内容の要旨

#### 目的

発熱と皮疹とが同時に出現する急性蕁麻疹は抗ヒスタミン剤の内服などが奏効しないことから、治療に特殊な考慮が必要である。そこで本症の特徴を把握し、治療方針を決定する目的で、臨床的・組織学的に検討した。

#### 対象および方法

当科に入院又は外来通院した37.5℃以上の発熱を伴った急性蕁麻疹27例(7~73歳)を対象に既往歴、臨床所見、各種検査所見、さらに極期の紅色膨疹を生検し、組織所見と皮疹の性状、特に個疹の持続時間を対比検討した。

#### 結果

1. 臨床的検討。1) 膠原病の合併が1例、反復性咽頭炎の既往が3例に認められた。2) 発熱は1~10日間(平均4.5日)持続し、皮疹の消退とともに解熱した。上気道感染様症状、特に咽頭痛又は咽頭不快感が19例、消化器症状が11例に随伴しており、他覚的にも咽頭発赤(15例)、扁桃炎(4例)を認めた。3) CRP陽性者が24例(88.9%)と多く、20例に白血球増多、特に成熟好中球増多を認めた。4) CH<sub>50</sub>は膠原病合併例を除き、26例で正常ないし上昇し、C<sub>3c</sub>が低値でC<sub>4</sub>が正常~高値が6例、C<sub>3c</sub>が正常でC<sub>4</sub>高値が7例あった。5) 細菌培養で4例(咽頭ぬぐい液、口蓋扁桃の膿栓、痰)で陽性であった。6) 副腎皮質ステロイドの内服又は注射が著効を示した。

2. 組織所見。真皮浅層の浮腫を主徴とする疎型は13例に過ぎず、細胞浸潤の目立つ密型はさらに好中球優

型7例、混合型4例、リンパ球優位型2例の3型に分けられ、そのほか血管炎型も1例あった。密型、血管炎型では個疹の持続時間が1日以上と長く、密型では膨疹が局面形状の傾向を示し、浮腫の消失後も紅斑が長く残った。

#### 考察

組織像は従来から蕁麻疹の典型像とされる疎型のほか、密型(浸潤細胞の優位性より3型に分類)、血管炎型が認められ、好中球が浸潤した症例が多い点が特異であった。

発熱の原因を推定すると、23例で上気道あるいは消化管を場とする何らかの感染症が示唆された。しかしながら免疫学的所見およびステロイドホルモンの有効性から、細菌感染など微生物そのものの直接作用ではなく、それによって引き起こされた免疫系、ことに補体系異常が関与していると考えられた。皮疹形成には好中球走化性因子の存在する可能性も考えられた。

#### 結論

発熱を伴った急性蕁麻疹は急性感染症、特に上気道・消化器感染症に基づく補体依存性の免疫現象による特異な蕁麻疹の1型と推察された。

## 論文審査の要旨

本論文は、蕁麻疹の種々のタイプのうちでもきわめて特異的、かつ特徴を有する急性の病型が存在することを明らかにした。

また、蕁麻疹についてはこれまであまり検討されていなかった組織学的所見について研究し、組織像が意外に多様性に富むこと、ことに好中球浸潤が稀でないことを明らかにしたことにより、蕁麻疹の発生病理に新知見を加えたものであり、学術上の価値あるものと認める。

### 主論文公表誌

発熱を伴った急性蕁麻疹の臨床的組織学的研究  
東京女子医科大学雑誌 第59巻 第5号  
369-381頁（平成元年5月25日発行）

### 2) 毒素性ショック症候群

皮膚臨床 29 (11) : 1103-1109, 1987

### 3) 家族性寒冷蕁麻疹

皮膚臨床 29 (12) : 1249-1255, 1987

### 副論文公表誌

#### 1) 表在性基底細胞腫の統計的検討

—自験7例の報告—

皮膚臨床 25 (11) : 1085-1090, 1983